法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-04-05

最初の児童分析家ヘルミーネ・フークーヘルムートの児童分析の技法

丹羽, 郁夫 / NIWA, Ikuo

(出版者 / Publisher)
法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration : reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
73
(終了ページ / End Page)
94
(発行年 / Year)
2014-03-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009644

＜論　文＞

最初の児童分析家ヘルミーネ・フークーヘルムートの児童分析の技法

丹　羽　郁　夫

【抄録】　最初の児童分析家であるヘルミーネ・フークーヘルムート（1871-1924）が発表した『児童分析の技法について』に示された児童分析の考えと技法について整理し、検討した。彼女は、子どもには大人と同じ方法を使うことはできないとし、子どもの特性に応じた様々なやり方を工夫・考案し、体系化された児童分析の理論と技法の構築はできないと考えた。その技法は、教育的側面を強調したものであり、自由連想法や夢分析以外に、積極療法、遊びの導入、親の抵抗管理と親からの情報収集などを含み、可能な場合には抵抗や転移の説明を行うものであるが、洞察を目指すことは少なかった。それは、A. フロイトとM. クラインが後にそれぞれ発展させた対立する要素を含む幅広いものであったが、後継者2人のそれぞれの体系化によって、未完成だった彼女の技法は忘れ去られてしまった。彼女の児童分析の特徴については、2 人の後継者との比較および現代の心理臨床の視点から検討を加えた。

【キーワード】　ヘルミーネ・フークーヘルムート　　精神分析　　児童分析　　遊戯療法
子ども

１．はじめに

ヘルミーネ・フークーヘルムート Hermine Hug-Hellmuth（1871-1924）は、A. フロイトやM. クラインよりも早くから子どもへの精神分析の適用を開始した最初の児童分析家であるが、彼女の生涯や仕事は長く知られることはなかった。彼女はウィーン精神分析協会の 3 人目の女性会員であり、放射能の研究によりウィーン大学で博士を取得した最初の女性の一人であり、ハプスブルグ帝国の貴族の子孫でもあった。彼女のような高い社会的地位にあった人物が精神分析の世界で長く忘れられたのは不思議であろう。外的要因としては、精神分析の世界で児童分析が関心をもたれるより前の時代に、異母姉の非嫡子の息子ロルフによって殺されたこと、この彼女にとって甥であるロルフが彼女の初期の論文の主な観察対象者であったことから新聞等が精神分析のスキャンダルとして扱ったこと、そして彼女が自分についてなにも書かれないことを望んだ遺書などが影響している

と考えられる。また、内的要因として、彼女の児童分析の技法自体の内容も考えられる。彼女の児童分析はどのようなものであったのか。彼女の児童分析については、日本では既に50年前に鑪（1964）による紹介があるが、その後の半世紀の間にフーク－ヘルムートの生涯と児童分析を中心とした彼女の仕事についての研究が蓄積されている。さらに、A. フロイトとM. クラインの児童分析の日本への紹介が進み、日本の子どもの心理臨床も発展した。そこで、本論文では、まず、彼女が発表した児童分析の技法についての最初の論文『児童分析の技法について On the Technique of Child-Analysis』（1921）の基本的な考えと技法について整理を行う。次に、それをA. フロイト（Freud, A., 1927, 1928）およびM. クライン（Klein, 1927, 1932, 1955）が主張する児童分析の理論と技法との比較から、そして現在の日本の子どもの心理療法の視点から検討を加える。なお、彼女の生涯と仕事全体の詳細については、MacLean & Rappen（1991）および丹羽（2013）を参照されたい。

２．ヘルミーネ・フーク－ヘルムートの児童分析の基本的な視点と技法

『児童分析の技法について』は、1920年にハーグで開催された国際精神分析学会第６回大会で発表され、その翌年に独語と英語翻訳版がそれぞれ異なる研究雑誌に掲載された（本論文は後者の英訳版に基づいて論述した）。この論文からまず分かるのは、フーク－ヘルムートが初めて精神分析を子どもに適用するにあたって、大人と同じような精神分析を行うことができないと考え、目標や技法の上でさまざまな修正を行っていることである。そのなかでも最も大きな修正は、精神分析に治療的側面だけでなく教育的側面を加え、「教育的精神分析」を提唱したことだ。また、年齢、知的能力、気質など子どものさまざまな特性に応じて、洞察を目指す自由連想法以外の複数の技法を工夫し、考案している。そして、このような子どもの多様性を考慮すると、児童分析の決まった方法の構築はできないと考え、実際に行わなかった。以下に、彼女の論文に見られる児童分析の技法について述べたい。

２－１．教育的精神分析：児童分析の治療的側面と教育的側面の必要性

フーク－ヘルムートは、論文の最初に「子どもと大人両方の分析は同じ目的と目標、すなわち意識および無意識の影響によって危険にさらされている健康と平衡へ心を回復させることである」と述べた後に、大人と子どもへの精神分析の違いを主張している。子どもとの精神分析は「幼い者を苦しみから解放するだけでなく、道徳的および審美的価値も与えなければならない」と記述したのだ。その理由として、子どもは「自分の行為に責任を持てる･･･成熟した人間ではなく･･･まだ発達しつつある段階にあり、強い意志と明確な目標を持った人になるために、精神分析家が教育的指示

によって強くしなければならない」からと彼女は考えた。このように、彼女は児童分析では治療的側面だけでなく、教育的側面も併せ持つ必要があるとし、児童分析は「教育的精神分析」でなければならないと主張した。子どもたちへの精神分析では「倫理的および社会的基準」に合うように教育することも必要だと考えたのである。そして、彼女は、「精神分析家であり教育者でもある人は、児童分析の目標が『性格分析』、言い換えると教育であることを忘れるべきでない」とも述べており、教育的精神分析は適切な性格を作ることであると考えた（以上、全てp.287から引用）。さらに、教育的精神分析には、幼い子どもの心身両方の躾を担っている婦人、特に理解力があり、心の優しい婦人が向いていると考え、このような婦人に精神分析の訓練を行うことが重要であると述べた（p.289）。現代の心理臨床の視点からみると奇妙な提案であるが、彼女が子どもの援助にとって教育および躾が欠かせないと考えていたことが伺える。彼女が教育的側面を強調する背景には、彼女自身の教師の経歴と非行傾向のあった甥ロルフへの関わりが大きく影響しているだろう。そして、以上の考えは「児童分析家は･･･分析的な見方に加えて第2の展望、すなわち、教育的な面も併せ持たなければならない」と述べたA. フロイト（Freud, A., 1928 邦訳 p.156）と共通する。MacLean & Rappen（1991）が指摘したように、彼女の論文とA. フロイトの論文には類似する考えや表現が多く見出されるので、A. フロイトからの引用部分には日本語訳のページを付記する。

しかし、一方で、フークーヘルムートは家庭や学校で通常行われている教育が持つ抑圧する否定的な側面を指摘している。例えば、思春期の女の子が男の子よりも家庭での葛藤に無力で敏感であることの説明の一部として「少女の方が、より抑圧を目指す教育のために家庭生活により強く結びつけられている」（p.288-289）と考え、また、子どもたちが自分の考えを自由に話せない要因として「『ばかげたことを言わないで』などの日常の教育で植えつけられる習慣から自由になることができない」（p.299）と述べた。このように、彼女は教育に対して、間違いをなくす側面と抑圧する側面の両方を見ており、教育に対して両価的な考えを持っていたと思われる。

以上に関して、A. フロイトは、子どもの「超自我は弱いということ、超自我の要求は外界に依存しており、したがって、子どもの神経症も外界に結びついていること、衝動が解放されたとして、子ども自身にはそれを制御する力はないということです。そこで、分析家は責任を持って、衝動の通り道をつけなければなりません。ですから、精神分析家は、非常に難しい、対角線上に相対する2 つの機能を、ひとりの人間に関連づけて仕事をしなければなりません。つまり、分析することと教育すること、言い換えるならば、許すことと禁止すること、ほどくことと束ね直すことを、ほとんど同時にしなくてはなりません」（Freud, A., 1927 邦訳 p.66-67）と述べている。すなわち、A. フロイトはフークーヘルムートよりも明確に教育の必要性を子どもの超自我の弱さと親への依存で説明し、さらに教育の否定的な側面である抑圧作用を弱めるものとして治療を対峙させ、教育と治

療を同時に行うことの意義を明確にしている。また、A. フロイトは教育によって形成する必要のある超自我を「社会の倫理的、審美的代表者である超自我」（Freud, A., 1927 邦訳 p.52）と述べ、さらに性格分析についても言及し、子どもは大人と比べて以前と違った性格を作り上げることが可能だと述べている（Freud, A., 1927 邦訳 p.64）。以上から、A. フロイトがフークーヘルムートの論文から強く影響を受けており、彼女の曖昧な部分をより明確に整理し、発展させようとしていたことが分かる。

２－２．子どもと大人との違い

彼女は子どもに特殊な技法を用いなければならない要因として、前述した発達途上にある点以外にも大人との相違をいくつか挙げている。まず、子どもが外的世界と特別な関係を持っている点で大人との違いが 3 つあると考えた（以下、p.287-288）。それは、①「子どもは大人のように自分の意志ではなく、親の望みで･･･連れてこられる」、②「大人は過去の体験で苦しみ、子どもは現在の体験で苦しんでおり、その子どもの変化しつつある体験は子ども自身とその周囲との間の絶え間なく変わりつつある関係を形成している」、③「子どもは大人と違い･･･自分が変わることや自分の周囲への現在の態度をやめることを全く望んでいない」し、「環境のあらゆる変化に合わせられる」、である。彼女はこの記述について説明を行っていないので、筆者が補足すると以下のようになるだろう。①と③は、子どもには治療への動機づけが欠如しているため、子どもとの継続した分析のために本人および連れてくる家族への特別な対応が欠かせないということである。この子どもの動機づけの欠如についてはA. フロイトと共通するが、A. フロイト（Freud, A., 1927 邦訳 p.3-18）は準備段階を設定して、子どもに直接働きかけることを強調した点で異なる。②については、子どもが現在の体験で苦しみ、過去の体験では苦しんでいないという前半の記述には、多くの心理臨床家から疑問が提出されるだろうが、後半の記述は同意を得られるだろう。子どもの現在の体験の変化が家族に影響を与えるという指摘は、治療のプロセスによる子どもの問題の変化に家族が対応できるよう援助することが避けられず、それを怠れば治療の中断を招くという心理臨床家の多くが経験していることを示唆している。

もうひとつの子どもと大人との違いは、子どもは自分の考えや気持ちなどを話さないことである。例えば、「幼いクライエントは心の中にある感情を話すことや、最初の治療の時間に自由に話すことは極めてまれである」とし、その理由として、「子どもは、父親か母親の対象表象である分析家に対して疑いでいっぱいであるから」（p.296）と主張している。また、前述したように「『ばかげたことを言わないで』などの日常の教育で植えつけられる習慣から自由になることができないために、子どもたちに自分の考えを自由に話させることの難しさ」（p.299）も指摘しており、言葉で直

接表現する以外の媒介手段を活用することの必要性を示唆した。また、子どもは物事が意識されずに通り過ぎ、関心もすぐになくなるので覚えていない（p.304）とし、子どもが体験してきた状況に関する正確な情報を子ども以外から得る必要性も指摘した。

２－３．児童分析において考慮すべき子どもの側の要因

（１）子どもの年齢の違い

フークーヘルムートは、児童分析には子どもの個人的な要因に応じてさまざまな技法が求められると考えているが、まず年齢の違いに応じて技法を使い分ける必要性を述べている。

彼女は「精神分析の原則に基づいた正式の精神分析は７、８歳より後にのみ可能」と述べている。しかし、７、８歳より年上の子どもに関しても、「通常のやり方から外れ、部分的な結果に満足しなければならない」と指摘した。その理由として、精神分析では、「子どもは抑圧された感情と考えの強すぎる賦活におびえ、子どもの能力では同化できないほどの要請をされ、また子どもの心では解放されるのではなく、混乱してしまうだろう」（以上、p.289）と述べた。そして、大体14歳から18歳のより成熟した子どもの分析は、最初の数時間は大人の分析と類似しているとし、「治療の要因、陽性と陰性の転移、抵抗、体験全体の中の無意識の重要性について話すことができる」（p.291）と彼女は考えているが、あくまでも教育的精神分析であるとしている。そして、「もっと幼いか遅れのある子どもの精神分析は最初から異なる方向を進む」（p.291）としており、７、８歳より年長でも13歳以下の子どもと14歳以上でも遅れのある子どもには、精神分析が可能であっても、初期でさえ、転移や抵抗等の説明は難しいと彼女は考えた。また、年齢を特定していないが、より成熟したクライエントには、信頼を得るために、分析家は自分の立場を表明することを彼女は勧めている（p.293）。そして、このように、精神分析が可能な年齢をほぼ児童期以上に設定している点はA. フロイト（例えば、Freud, A., 1928 邦訳 p.155）と共通する。

以上の精神分析が適用可能な年齢に対して、精神分析的な方法が適用できない７、８歳以下の年齢の子どもには、「大人の分析的治療に似た分析はできない。精神分析の知識に基づいた教育的な方法を用いることだけができる」（p.289）と考え、彼女は精神分析の知識に基づいた教育的方法を提唱した。この方法の説明はないが、上の文章の下に「子どもの考えと感情の世界を十分に理解することは限りない信頼を引き出し、このようにして子どもたちをさまざまな間違いや傷つきから守る方法を見つけ出す」と述べている。彼女は、子どもを守る方法を見つけ出し、それを教える方法を考えていたようである。また、７、８歳の子どもには「一緒に遊ぶこと」（p.294）が有効であることを指摘した。彼女は遊びを正式な精神分析的な方法とは考えていなかったが、後で紹介するように、子どもの遊びに象徴的に示された内的世界を理解し、それを説明している。彼女は、児童

分析の領域に「遊び」と「遊具」を初めて導入し、M. クラインより早く遊戯療法に先鞭をつけたのである。

（２）治療を理解できるかどうかの違い

子どものクライエントは、周りの子どもが精神分析を受けていて治療が何であるかを既に知っているか、直ぐに気づく可能性のある子どもと、気づけない子どもに分けることができ、この違いによって対応が異なると彼女は考えていた。前者の子どもたちには教育的精神分析が適用できるが、後者の、年齢が低い、症状に苦しんでいない、体質および気質が脆弱 a feeble constitution などの個人の要因から、通常の「分析の治療対象として光を当てられない子どもたち」には、「分析家は、知識をいくらか与えるため、間違った行動をいくつかなくすため、あるいは一緒に遊ぶため」に分析の時間を使うことで何らかの援助ができると彼女は考えた（以上、p.289）。しかし、どちらの子どもたちにも、彼女は話をする目的およびクライエントの義務を伝えることの必要性を強調した。しかし、それが容易ではないとも考え、「話をする目的をクライエントに伝える適切な時期についてのルールを定めることはできない。すなわち、経験および個人の鋭い感覚だけが信頼できる指針である」と記述している。義務に関しては、後者には「完全に秘密のないことを求め、心に生じている全てのことを検閲しないで表現」することを求めることは可能性のある時のみ提案できるとした。一方、前者には、完全に秘密がないようにすることに加え、「仲間、兄弟や姉妹、あるいは家族の他のメンバーと治療について話さない」義務を求めることも可能であり、適切であると考えた。そして、この義務を最初に求めることは大人では治療が効果を持つ必要条件であるが、子どもにも重要であるとしている（以上、p.290）。以上の 2 つの義務に関しては、A. フロイトも同様に「子どもが身を固くして守り続けていた秘密を、放棄するように求めました」（Freud, A., 1927 邦訳 p.14）と「私だけに話してくれて、他の人には話してはいけない」（同上 p.63）と語ったことを記している。

２－４．児童分析のさまざまな技法

（１）正式な精神分析的アプローチ

フークーヘルムートは、子どもには大人と異なる特殊な技法が必要と述べているが、全く異なる技法ばかりを用いていたわけではなく、可能な場合は自由連想法や夢分析のような大人に用いる技法をそのまま、あるいは修正して用いていた。

ⓐ自由連想法

「自由連想法を用いるべき程度と時期は、その状況が生じた時にだけ決められる」（p.298-299）と記述しており、彼女は子どもにも自由連想法を用いており、状況に応じて用いる時ややり方を変えていたことが分かる。そして、この自由連想法の導入と思われる記述として、上で述べた「完全に秘密のないことを求め、心に生じている全てのことを検閲しないで表現すること」（p.290）があり、これを、伝えられる子どもにのみ提案したと考えられる。

しかし、自由連想法を実施する設定については、寝椅子に横たわることが子どもにとって様々な不安な状況を生むことを指摘し、寝椅子を用いない自由連想法を実施していたようであり、対面でも治療が成功すると主張している（p.292-293）。もっとも、後の彼女の講義（1924）には、16歳と17歳の少女に寝椅子を使用する自由連想の技法を用いた事例が紹介されていることから（MacLean & Rappen, 1991, p.37から引用）、思春期以降のクライエントに対しては、可能な場合には、寝椅子を用いた自由連想法を使用していたことが推測できる。A. フロイト（Freud, A., 1927 邦訳 p.298-299）も自由連想は子どもの分析でも時に有効に用いることはできるが、基盤として用いることはできないと述べており、両者とも自由連想法を子どもに適用することには制限を加えている。

ⓑ夢分析

大人の精神分析で用いられる夢については、「夢は児童分析で役に立つ」とし、「子どもたちは自分の考えを全て自由に話すことが難しい」ことから、「夢でなければ表現されない子どもの空想」を表すと述べている（以上、p.299）。しかし、この論文には夢についての記述はこの程度であり、夢の象徴的な意味等については他の論文（例えば、Hug-Hellmuth, 1912）で詳述している。A. フロイト（Freud, A.,1927 邦訳 p.24-27）も子どもの分析で夢を重視しているが、その象徴的な意味を子どもと一緒に探索する方法を提案しており、夢分析の技法を子ども用に発展させている。

（２）積極療法

フークーヘルムートは大人に有効な「積極療法」も児童分析に役に立つと述べており、これはフェレンツィ（例えば、Ferenczi, 1926）の試みた積極技法のことを指しているようである。積極療法とは精神分析の受身的な方法とは異なり、分析家がクライエントに積極的に働きかけるやり方であり、A. フロイトもこの積極療法に言及している （Freud, A., 1927 邦訳 p.64）。具体的には、彼女は劣等感の強い子どもの自信を高める上で、適切な程度の課題を要求することが重要であるとした。その場合、「直接的な禁止はどれもできるだけ避ける」ことがより重要であること、そして指示と禁止よりも有効なのは所与の状況の長所と短所について一緒に話し合って判断することであ

ると述べている（以上、p.298）。治療における秘密の義務に関する部分でも「指示と禁止をすることは幼い子どもにそれを破る気にさせる方法」（p.290）と述べており、彼女は子どもに対する強制的な働きかけには極めて慎重であったことが伺える。他に彼女が積極的な働きかけを行う方法に言及しているのは、「指導 guidance」（p.287、p.299、p.301）、「知識のいくらかの提供」（p.289）、「指示 commissions」（p.298）、そして「助言 advice」（p.301）である。これらは学校現場で用いられることの多い教育的方法であり、彼女の言う教育的側面のアプローチに該当すると考えられるが、これらの方法について彼女は体系的な説明を行っていない。

また彼女は知識の提供に関連し、抑圧された特定の領域に関する方法を紹介している（以下、p.300-301）。彼女はS. フロイトの性的欲動論に忠実であり、性的欲動が子どもの心的生活において重要であると考え、親や教育が秘密にする内容を子どもに率直に話していた。性について隠さず話す分析家に対して、子どもは、親や他の大人の家族が性の謎について話さないことに慣れているので、「大人と同様に尊重されていると感じ、もっと友好的になろうと分析者の率直さに応えようとする」反応をすることがあるが、「抵抗が生じると直ぐに、禁じられた事柄について話しているために、（早期の抑圧によって）分析者を軽蔑する」反応をすると指摘している。そして、分析者が親的な役割をせず、分析者から自由と完全な理解を期待できることから、分析者は子どもに対して父親あるいは母親の理想的な対象表象を具体化する。一方で、親の権威への過大評価のために、子どもは分析者とその話を疑うようになり、分析者に対するアンビバレンスが最も顕著になって指導や助言が困難になると述べている。それと並行して、親に対しても、もう一度信頼したい願望と同時に早期の失望をめぐる古い感情が子どもに生じると述べている。この方法は知識を提供する点で教育的であるが、同時に抑圧された内容も刺激する点で治療的でもある。

（３）遊びの導入

遊びについて、彼女は正式の精神分析を適用できない、治療の目標と目的を知らないか直ぐに気づけない子どもや 7 歳や 8 歳の子どもに使用できると考えた。そして、「分析家は一緒に遊ぶことで道を開くことができ、そうすることで、いくつかの症状、奇妙な癖、そして性格特性を確認することができ、これらのとても幼い子どもたちの場合には、治療全体を通して遊びが重要な役割を果たすことが多いだろう」（p.294-295）と述べている。つまり、遊びが子どもども内的世界の理解と援助に役立つと彼女は考えていたようである。

彼女の論文には、両親の性生活を目撃したことが原因で不眠に苦しんでいると推測される 7 歳の少年の事例が報告されており、この幼いクライエントに、類似した問題を抱えた他の子どもとの分析を話す策略（策略については後に説明）のなかでの遊びの使用を描写している（以下、p, 295-

296)。この児童分析は以下のように展開した。この幼いクライエントは、セッションの間中、分析者にクライエントの玩具を使って一人で遊ばせることで、分析者と一緒に部屋にいることができたが、全く反応することがなかった。そこで分析者は、夜に寝ようとせず、両親が寝られないように音を立て、父親の睡眠を妨げて叩かれた他の子どもについてクライエントに話した。すると、彼はサイドボードまで走って、ムチを持った正装した男性人形を持ってきて、この人形の腕で分析者を叩いて「お前は行儀が悪い」と言った。次に、分析者がその子が父親の邪魔をして父親がいなくなることを望んだことを言うと、クライエントは「僕のお父さんは戦争に行っているんだ」と言い、突然、小さなガンをとって「プッ、プッ」と言ったとある。この子どもの反応の象徴的な意味について彼女は述べていないが、どちらの反応も話された少年の父親、そしてクライエント自身の父親への同一化が示されていると推測できる。つまり、前者は叱る父親、後者は不在の父親への同一化による不安の防衛と考えられる。

次の日、この幼いクライエントは「父親に向けた死の願望をもっとはっきり示した。彼は自動車の玩具で遊びながら、何度も運転手をひいた」とあり、その運転手は話された子どもの父親を象徴していると分析者は理解したと記述している。ここでは、話された子どもの父親はさらにクライエントの父親を象徴しているだろう。彼女は、子どもは遊びによって自身の無意識の欲動と感情を遊びで象徴的に表現することを示しており、M. クラインの遊びを子どもの内的世界の象徴と見なす考えと等しい。それに対して、A. フロイトの夢、白昼夢、描画から子どもの内面を理解し、遊びを使用しない技法（Freud, A., 1927 邦訳 p. 24-35）と彼女は異なっている。

その後の遊びでは、幼いクライエントが話された子どもの父親を車でひいた遊びに関連づけて、分析者は話された子どもの父親の事故のニュースを電話で子どもに伝える振りをしたところ、この子どもが涙を流して悲しんだとし、「以前は厳しい父親にいなくなってほしいと望んだけど、今はとても悲しい。それは、そう望んではいるけど、実際はお父さんをとても愛しているから」と話した。つまり、遊びの中で、他の子どもの気持ちであるが、このクライエントと同じ気持ちを言葉で説明している。そして、この話を聞いたクライエントは、飛び上がって、部屋から走り出たと彼女は報告した。そして、このクライエントは、翌日も同じ話を聞いて部屋を出るまでの一連の遊びを分析者に求めたとある。おそらく、自ら要求して遊びを繰り返すことによって、分析者によって間接的に語られた認めることがまだできない自分の気持ちを心のどこかの層で受け入れ、消化するプロセスを開始したと思われる。

以上の報告は、この幼いクライエントに当てはまる他の子どもの行動や気持ちを分析者が言語化するたびに、このクライエントは行動で反応したことを示している。最後の部屋を出る反応について、彼女は「彼が突然部屋を出ることに無意識の動きを見ることができる」とし、子どもは分析者

の発言に言葉で認めることはないが、象徴的な行動で肯定を示すと彼女は考えていた。そして、提示した事例の根本的な要因である「原光景」の意識化は発達のずっと後だと述べた（以上、p.296）。

その後に再びこの幼いクライエントを取り上げた部分（以下、p.297）では、遊びによって問題が軽減した働きかけを示している。このクライエントが鼻に指を入れたのを鏡で見た分析者が「そんなものは見たくないわ」と伝えると、子どもはいたずらっぽく微笑んで「見ないでよ！」と鼻に指を入れながら言い、分析者が禁じるのを期待して、この遊びを何度も繰り返したと報告した。これは、厳しい父親から小さな悪い行いを見つからないようにしてきた体験を象徴する遊びであり、このクライエントは、この遊びを通して、主な症状であった完全な無気力から目覚めたと彼女は述べている。この分析者の側から積極的に働きかけて遊びを展開させる介入は、子どもの父親が事故にあったニュースを伝える振りをする遊びにも見られる。このような精神分析での遊びの利用は、分析者から働きかけ、さらに一緒に遊ぶことで、子どもの問題を遊びで表現・展開させ、遊びの持つ創造力（空想と現実を結びつけ、同時に双方とのほど良い距離を保つ力）を活用するD.W.ウィニコットが『ピグル』（Winnicott, 1977）で示した技法へとつながるだろう。また、治療者が子どもと一緒に遊ぶやり方は日本の遊戯療法一般と同じであり、現在の欧米での子どもの心理療法ではほとんど行われないことが、彼女の児童分析では行われていたことを示している。

（４）策略の使用

彼女は、頑固に黙っているケースには策略 ruse が役立つと考え、２つの策略を事例と一緒に紹介している（以下、p.294）。最初は、分析者が子どもに助けを求め、子どもが分析者にとって役立つと思うようにしむける策略である。これは、最初のセッションで分析者の言葉に全く反応しない自殺衝動のある９歳の少年に対して、分析者が目になにか入っている振りをしたことである。これに対し、この子どもは「僕に見せて。外に出すよ。こすっちゃ駄目だよ」と言い、打ち解けることができたと述べた。その後も、強い抵抗や沈黙が生じる度に助言や助けを求めることで、分析が再び順調に進んだと報告している。二つめは、前述した幼いクライエントに他の子どもが持つ類似した悪い行いや奇妙な癖について話す策略であり、遊びの導入で紹介した事例にこの策略の具体的な使用を記載した。彼女は、これを失敗しない策略と考えており、これを使用すると、他の子どもの行動として話された後に、自分の行動として認めることが多いと主張している。しかし、このような策略の使用は、現在の心理臨床では倫理上の問題から難しいだろう。

２－５．治療論

（１）児童分析のプロセスにおいて生じる現象と対応

フークーヘルムートは子どもとの精神分析の治療プロセスでも、大人と同様に、転移や抵抗などの現象が生じると考えており、さらに、それらの現象を「解釈」はできないまでも、「説明」することができ、その必要があると考えていた。特に、転移が生じることに関しては分析家が父親と母親の対象表象になると指摘している（p.296, 300, 301）。また、A. フロイトのように、子どもの転移が制限されることや、陽性の転移を重視して陰性転移を扱わない（Freud, A., 1927 邦訳 p.36-49）という考えはなく、この点ではM. クラインに近いだろう。

対応に関して、「専門用語を用いることはできないが･･･かなり幼いクライエントのケースでさえ、治療経過で生じるいくつかの現象を説明する必要がある」と彼女は考えた。抵抗については、最初は陰性転移である反抗の気持ち、次に、陽性転移である自分自身や家族にとって恥となることを告白する恥ずかしさ、との関連で説明すれば、子どもは抵抗の意味をすぐに理解し、「もう言わない」という自身の言葉の意味を理解するだろうと述べている（以上、p.299）。また、転移に関しては、子どもにとって「陰性転移は陽性転移という考えよりも一般的に受け入れられやすい」と考え、陽性転移を扱うことは慎重にすべきであり、それは「子どもは自分の親を知らない人と取り替えたくないため」であると記述した（以下、p.300）。そして、この陽性転移に関して、治療者が共感的に冷静に聞くので、子どもは一般的に父親や母親の理想像を示す陽性転移を最初に示すとしている。それに対して、陰性転移は、通常は分析者に「騙される恐れ」で表れ、分析者に秘密を守ることを要求することで示される。この分析者への不信感は、自分をさらけ出したくないことと、どんな家庭でも最初の数年間に子どもに与える無数の失望から生じるとし、子どもの現実的感覚と転移を要因として挙げた。また、この分析者への不信感によって、子どもは分析者と親との面接に対して不安になり、警戒するようになり、盗み聞きし、さらに面接時間を短くすることも引き起こすと彼女は述べた。これは、現在の心理臨床における、一人のセラピストが親と子ども両方を担当する場合に配慮が必要な子どもの気持ちについての最初の指摘であろう。さらに彼女は、この論文の後に前述した講義（1924）で、転移解釈やその前に防衛解釈をおこなった事例を報告（MacLean & Rappen, 1991, p.36-37から引用）しており、この点ではM. クラインにより近い技法を使用していたことが分かる。

（２）治療の機序

治療の機序については、具体例を本論文の遊びの導入で既に述べたので、記述が重複する部分があるが、彼女の考えを以下に整理したい。

彼女は児童分析において「洞察」（p.299）を目指すことに言及しているが、「多くのコンプレックスが、幼いクライエントに意識化されるかどうか、あるいはどれほどの『洞察』を得られるかはあまり重要ではない」と主張している。そして、児童分析で「重要なのは苦しんでいる人たちに対する分析者の直感的に理解する力である」とし、その理解に基づいて「初めは応答するだけで十分である」と考えた。さらに、自分の問題の意味を「受け入れることは意識的な作用では生じない。子どもの精神分析のプロセスの大部分は無意識で生じ･･･それはずっと無意識に留まり、行動の変化によってのみ子どもの苦しみが無駄ではなかったことが分析者に分かる」（以上、p.301）と述べている。この前には、「大人の場合は、無意識の欲動と感情を十分に洞察することを目指すが、子どもの場合、この種の自認は言葉でなく、象徴的な行為で示され、それで十分である」と述べ、子どもは分析者の発言に言葉で認めることはないが、行動の変化で肯定を示すと指摘している。そして「子どもでは、多くの心象は意識の入口には決して到達しないが、著しい痕跡を残す」と述べ、「原光景」のような根本的な要因については断片的な記憶さえ意識化できず、しかし痕跡は残っており、前意識の領域で新しい心象との混合が生じ、発達のかなり高い段階でようやく意識化されると考えた（以上、p.296）。つまり、児童分析においては、分析者は子どもの問題の理解を言葉で伝えて意識化させる必要はなく、直感的な理解で応答することで、子どもの無意識のレベルでの一種の問題の受容が生じ、それは子どもの象徴的な行動に現れ、それで十分であると彼女は考えていた。現在の子どもの心理臨床では、洞察だけでなく、遊ぶこと自体やセラピストとの関係などさまざまな治療機序が知られているが、彼女は洞察以外のプロセスを通した子どもの問題の軽減を多く経験していたと考えられる。

また、彼女に治療が最も困難なタイプと述べさせたのは、全てにイエスと言うが、心の中ではノーと言って表面だけの服従をし、分析者の反応に対して心の深い部分が動かない強固な防衛を持った子どもたちである（p.301-302）。この考えは、D.W.ウィニコットの「偽りの自己」(Winnicott, 1960）を連想させる。

２－６．治療構造

（１）治療の場所

最初の面接を行う場所について、親との面接の時、子どもは別室で待っている間に人目にさらされ、誇りが傷つけられたと感じ、取り除き難い治療への抵抗が生じると彼女は指摘し、治療者の診察室よりも子どもの自宅を勧めている。その後の治療においても子どもの自宅を勧め、その理由として、子どもの家では個人的な話をすることの難しさがあるが、診察室では子どもが気まぐれで、あるいは親にお金を出させる反抗や仕返しで治療に遅れることや休むことを挙げている。親の側も

子どもの治療に付き添うことができないと思いやすく、それを理由に治療を終結にしがちなことを述べている（以上、p.291-292）。このように、彼女は子ども自身の治療動機づけの欠如と親の付き添いの必要性という治療継続の難しさに注目して自宅で治療を行うことを提案した。だが、状況に応じて診察室も用いていたことが、A. フロイトの友人Anny Katanの目撃から推測できる（MacLean & Rappen, 1991, p.31）。これに対し、A. フロイトは診察室を使用していたことが、父親S. フロイトの患者と彼女の子どものクライエントが待合室で話をしたという記述（Freud, A., 1927 邦訳 p.18）から分かるが、家庭訪問した報告（同上 p.41）もあるので、子どもの自宅も使用していたことが推測される。M. クラインは最初は子どもの自宅を使用していたが、母親が治療に対して敵対的であることと、日常生活から切り離されていないと子どもに転移状況が確立・維持されないことに気づいて、子どもの自宅以外の部屋を使用するように変えている（Klein, 1955 邦訳 p.161）。現代の心理臨床では、M. クラインが気がついたように、日常と非日常の区別が重要であるという考えから、子どもの自宅を用いることはなく、玩具が準備された子どもの心理療法専用の部屋を用いるのが一般的である。

また、多くの子どもが一緒に過ごす機関内で分析を行うことは、子ども自身が秘密を守れないことと治療時間を持つことから嘲笑に対象となりやすい点で彼女は否定的である。だが、上記のような問題を含めた精神分析治療で生じるさまざまな困難に対処できる、子どもの精神分析専用の宿泊施設の建設には希望を表明しているが、具体的なことを彼女は述べていない（以上、p.292）。

（２）治療時間と回数

フークーヘルムートは、子どもの分析の時間は学校への出席によって左右されるため、S.フロイトの主張する週５、６回の妥協案として、「継続することが特に難しい幼いクライエント」ではないことと「分析が長く行えるなら」という条件付きで「週に３、４回だと望ましい結果になる」と考えた。また、１回の精神分析は１時間のようであり、この時間を厳密に保つことが最も重要であると述べ、治療時間の終わりに子どもが重要なことを伝えようとしても、時間延長を拒否する自制心が重要であるとしている。その理由として、クライエントが分析者よりも優位に立つのを防ぐことを挙げた（以上、p.290-291）。このように、決められた時間を守ることが子どもの場合は難しいことが多いが、それを守ることが重要であるという指摘は現在の心理臨床の知見と同じである。

２－７．児童分析における留意点

（１）分析者と子どもとの関係の構築

前述したように、子どもには治療への動機づけが欠如しているため、さまざまな工夫が必要にな

ると彼女は考えた。まず、子どもと治療者の間に信頼関係を構築することの重要性を痛感していたと思われ、信頼関係に繰り返し言及している。そのため、治療の最初の時間を幼い子どもとのラポールの形成と「打ち解ける」ための機会として彼女は重視した（p.293）。また、７、８歳以下の子どもに関しては「子どもの考えと感情の世界を十分に理解することは限りのない信頼を引き出」すと述べている（p.289）。さらに、「思いやりがあり共感的な関心を示し、時に励まし、適切な時に冗談を言い、子どもにとって重要などんな些細なことにも細心の関心を示すことは幼い子どもから十分な信頼を得る方法である」（p.298）と考えた。また、既に述べたように、成熟したクライエントには、信頼を得るために、分析家は自分の立場を表明することを勧めている（p.293）。そして、最も重要なこととして、「直感と忍耐、これは、信頼が硬い地盤に基づくために、若いクライエントとの最初の面接から置かれなければならない基本である」（p.302）と考えた。さらに、以前の場面で言われたことを忘れず、間違えないことは「子どもからの要請」として強調している。また、彼女は、子どもは自分の考えや気持ちを話すことは難しいが、「親や兄弟や姉妹への非常に強い敵意によって、幼いクライエントがやむなく不平や罵りをどっと言い出す」場合、「幼いクライエントに最大限の寛容と子どもの苦しみへの十分な思いやりを示すことが必要である」（p.296）と述べており、直接は言及していないが、分析者の寛容と思いやりも関係の構築にとって重要な要因と考えていたことが推測できる。以上の考えは、A. フロイトが 「その後の分析を続けていくために、強い結びつきを作り上げること」（Freud, A., 1927邦訳 p.14）と述べ、後に治療同盟や作業同盟として発展させたものである。しかし、フークーヘルムートはA. フロイトのように陽性転移の重要性（同上 p.20）を主張せず、時に親との関係を妨げるものとして陽性転移を中立的に述べている。また、前述したように、関係を構築するためにA. フロイトが提案した精神分析の準備段階の必要性に彼女は言及していない。

（２）治療の最初の時間の重要性

治療の最初の時間がどれほど重要であるかを彼女は繰り返し述べており、それが子どもの問題理解、子どもとの関係形成、そして治療の指針と方法を決める上での好機と考えていた。まず、子どもは自分の考えや気持ちを自由に話さないため、「最初の治療の時間でのコミュニケーションあるいは症状的な行動が重要である。というのは、それらは乳幼児期の中心的なコンプレックスを示すからである」と彼女は述べている（p.296）。ここには学校の優秀なユダヤ人の話、『ローエングリーン』の主人公が演じるポーズが嫌いなこと、地理教育への批判というコミュニケーション、そして禁じられるのを期待して鼻に指を入れること（前述）や分析者のメガネを隠す行動の５つの例を挙げ、そこにそれぞれの子どもたちの中心的な問題が示されることを解説している（以上、

p.296-298)。次に、既に述べたように、彼女にとって最初の時間は幼い子どもとのラポール形成と打ち解けるための機会である（p.293)。そして、分析者は子どもの様々な要因に応じて、分析をどの方向に進めるか、どのようなアプローチをとるかを最初の時間に決めなければならないと彼女は主張している（p.293)。

（３）クライエントの家族に留意すべきこと

ⓐ家族への対応

「児童分析の重要な要因は分析家と幼いクライエントの家族との関係である」(p.302）と主張し、親の希望で子どもの分析が始まっているものの、この関係には難しい面があることを彼女は 5 点挙げている（第 5 の前者まではp.302-304、第 5 の後者はp.300から引用)。この記述は詳細で、広範囲にわたっており、現代の日本の心理臨床にも有益な示唆を多く含んでいる。

第 1 に、治療期間への親の期待による歪みである。まず、彼女は「精神分析は最終手段であり、他の教育的手段が全て失敗した親は精神分析にさえかなり不信感を持っている」ことを指摘した。しかし、それにも関わらず、分析家が前もって治療期間が決められないことや数ヶ月に及ぶことの説明をしても、親は「数日のうちに治る『奇跡的治癒』を期待する」か、「心の中に密かに期限を設定」するため、期待したよりも長くなると治療が中断しやすいことを述べている。

第 2 に、子どもの問題の悪化であり、これには 2 つの要因が挙げられている。まず、精神分析では「若い心は再結晶化のプロセスを通過しなければならず、この間に古い価値感が破壊され、この破壊的プロセスは混乱なく生じることはない」ため、「悪化」が生じることを述べた。そして、この悪化を「分析がさらに進展するよい兆候」と考えることが親には難しいと述べている。この指摘は、子どもとの心理療法を始める前に親や教師などの重要な人物には、一時的に悪化する可能性と、それが心理療法には欠かせないことを伝えておくことが現在の子どもの心理臨床で重要とされているが、その最初の記述であろう。次に、「治療がなくなることに対する子どもの抗議」から、一部は意識的、一部は無意識的に「最初の問題がかなり悪化」することがあり、治療に対する親の批判が痛烈になり、早すぎる中断を招くと述べている。この記述は、子どもとの心理療法を終結させる場合には特別の配慮を要するという現代の心理臨床の知見につながる最初の指摘であろう。

第 3 に、精神分析は「子育ての過ちの全てを明らかにする」ので、「ほとんどの親に不信と不安を引き起こす」ことを挙げている。

第 4 に、「親の過度の不安から、協力して精神分析を促進し、早くする」ために、母親は前述した「『積極療法』を用いたい願望を常に示す」が、それが治療には逆効果であり、「我慢と忍耐」の方が援助になることを納得してもらうことが難しいと述べている。

第 5 に、子どもが治療者に示す陽性転移に伴う問題を 2 つ挙げている。まず、彼女は「子どもが分析家に熱烈な愛情を示すのを見る時」に、特に母親が「自己愛から激しい嫉妬」を体験することを挙げており、この陽性転移が一時的な現象にすぎず、分析に必要であることを母親に説明する必要があると述べている。次に、子どもは分析者との間に示す陽性転移によって、分析者を家族に逆らう形で使うと言う。例として、「先生はあれこれする必要がないと言った」や「このことはまず先生に尋ねないといけない」という、親を「とても苛立たせる言葉」になることを挙げた。また、子どもは不平を聴く分析家を自分に同意していると思って、分析家に頼って親に反抗するたくらみを準備することも述べている。当然、これらは分析者と親との関係をこじらせるだろう。このように、彼女は児童分析によって子どもが家庭などの現実世界でさまざまな問題を引き起こすことを多く経験したと思われ、家族との関係で注意しなければならないことについて幅広い記述をおこなっている。そして、家族環境を調整する教育的働きかけに関して、「我慢と忍耐」および「勉強上の成果の期待の自制」（p.303）を求めることの必要性を述べ、親にそれに従わせることの難しさにも言及した。つまり、フークーヘルムートの家族への関わりは、子どもとの分析継続への家族の抵抗および治療効果への家族の妨害に関する管理に焦点が置かれている。

そして、この彼女の家族への関わりは、家族への対応は不要とするM. クラインと家族に積極的に働きかける必要があるとするA. フロイトとの間にあると考えられる。A. フロイトは、超自我への影響に関して子どもの内部と同時に外側の親にも働きかけられるので成果は大きいこと、そして環境を整えることで、子どもが適応しやすくできることを述べている（Freud, A., 1927 邦訳 p.66-67）。フークーヘルムートの家族への控えめな教育的アプローチは、この論文の最後（p.305）に記述された、精神分析から得た知識を簡潔に伝えることは、一貫性のない子育てをもたらし、より有害な問題を引き起こしやすいとし、親自身が精神分析を受けることを勧め、そうすることで分析を必要とする子どもが減るという主張とつながる。彼女は家族を教育するレベルでの支援には限界があると考えており、その点で家族との関わりはあくまでも子どもの援助を継続し、治療の効果を損なわないようにするためのものであり、控えめなものであったようである。

また、クライエントと家族との関係に関しては、治療過程へのクライエントのきょうだいの影響についても述べている（p.305）。彼女は、年下のきょうだいは、クライエントの内緒話を知りたがり、年上のきょうだいは、隠した羨望と憎しみの感情から、その気持ちが漏れることも半分期待して無関心を保つが、どちらの態度もクライエントには敵意と受け取られると述べた。また、クライエントは、分析家はクライエントのきょうだいに対して敵意があるという空想を持つと述べている。この状況に対する分析家の対応について彼女は具体的な提案をしていないが、これらに初めて注意を向けた。

ⓑ親からの情報収集の必要性

幼いクライエントの家庭や学校での問題およびクライエントの人生の最早期を知るため、彼女は、親に尋ねることを提案している（以下、p.304）。子どもから情報が得られない要因として、子どもは自分の人生を覚えていないこと、家庭や学校の状況への関心が長く続かいこと、そして意図的に秘密を守ることを挙げた。この尋ね方については、子どもの早期乳幼児期の心身の発達に関する一連の質問に親に書面で回答を求めると述べており、親と直接会っての情報収集ではないようである。そして、この質問によって、子ども自身だけでなく、子どもを取り巻く環境、すなわち「育った環境、人生観、教育方法」にも光を当てることは価値があると述べた。以上のような親からの情報収集の必要性に関しては、「児童分析家は、その子の生育史を実際のところ両親から得る以外に手がない」と述べるA. フロイト（Freud, A., 1927 邦訳　p.24）と同じであり、それを不要と考えるM. クラインとは異なっている。

（４）親が子どもに精神分析はできない

彼女は「自分の子どもを適切に精神分析することは誰にも不可能であると思う」と述べ（以下、p.304-305）、これは当時の精神分析状況への異議申し立てとなっている。当時、精神分析家が自分の子どもの精神分析を行うことはありふれたことであり、精神分析の文献で最初に報告された子どもの症例であるハンス少年の事例は父親が恐怖症の息子を分析するのをS. フロイトが指導した記録（Freud, S., 1909）である。また、S. フロイトは娘A. フロイトに精神分析を行っており、M. クラインも子どもたちを分析していた。S. フロイトと娘との分析関係については知らなかったかもしれないが、フークーヘルムートが精神分析の通例に異議申し立てをすることはめずらしい。理由として、彼女は「子どもは父親と母親に、意識的か無意識的な、最も深い欲望や考えを表すことはほとんどないだけでなく、この場合、分析家は勝手すぎる再構成をしがちであり、また精神分析によって暴露されるものを自分の子どもから聞くことに親の自己愛はほとんど耐えられないだろうから」と述べている。しかし、理由はそれだけではないだろう。彼女には非行的性格を指摘された甥が存在し、精神分析は行ってはいないと考えられるが、精神分析の観点から観察を行い、甥の内面を暴いて研究誌に公表して関係をこじらせていた可能性が高いのである（丹羽, 2013）。一方、Plastow（2011）は彼女が精神分析を行ったために甥に殺されたと考え、親族に精神分析を行うことの危険性に彼女が気づくのが遅かったと述べている。

３．考察

以上、フークーヘルムートの児童分析の技法を整理し、A. フロイトおよびM. クラインの技法との共通点と相違点、また現代の日本の子どもの心理臨床との関連について言及した。そこで、以下に彼女の児童分析の特徴とその意義について検討したい。

第一に、彼女の児童分析に決まった方法はないことである。上記したように、彼女は子どもの側のさまざまな要因に応じて、それに合った多様な児童分析の技法を柔軟に工夫・考案していた。児童分析に「決まったルールや手順」（p.293）を構築することはできないと考え、それは妨げにさえなると考えていたと思われる。このことは、彼女は論文のエピグラフ（p.287）に、S. フロイトの言葉「精神分析の実践における技法上の問題に明確に答えることはできない」（Freud, S., 1906）を引用したことにも示唆されている。彼女は援助すべき子どもとその時期ごとに、その子の特性と状況に合った技法を常に工夫し続けたのであり、それが重要だと考えた。

第二に、彼女の方法は児童分析における技法のほぼ全領域を含むことである。彼女は上記で示した工夫を繰り返すうちに、児童分析において可能性のあるあらゆることを考え、幅広い技法を試みることになった。そして、それはA. フロイトとM. クラインが後に発展させるものを含むことになったのである（Geissmann & Geissmann, 1998; Plastow, 2011）。フークーヘルムートと２人の後継者との類似点を整理すると以下のようになるだろう。A. フロイトとは、①教育的側面の重視、②治療同盟の強調、③精神分析の適用を児童期以降に設定、④正式の精神分析の制限、⑤親への関わり（情報収集と環境調整）の重視、そして、M. クラインとは、①遊びの導入、②遊びの象徴的内容の解釈、③転移が形成されることの認識、④陰性転移の解釈、が共通する。そして、それぞれの彼女との共通点がライバルである２人の対立点である。以上から、フークーヘルムートは、対立する要素も含んで、児童分析の可能性のある領域全体を提示した人物であると言ってよいだろう。彼女にとっては、どちらが正しいかではなく、目の前の子どもによってどちらが有効であるかが重要であり、児童分析全体にとってはどちらも必要なのである。

しかし、以上のような類似点があるのにも関わらず、A. フロイトとM. クラインは自分たちとフークーヘルムートとの共通点を認めることはなかった。逆に、二人ともライバルと彼女との類似性を指摘し、彼女を批判することを通してライバルを攻撃した。つまり、A. フロイトは彼女を遊戯療法家と見なして、彼女とM. クラインと結びつけ、一方、M. クラインは彼女が児童分析の対象を児童期以上に制限し、治療効果の限定性を主張し、教育的影響を重視したとして、彼女とA. フロイトと結びつけ、共に批判したのである（MacLean & Rappen,1991）。A. フロイトとM. クラインは1920年のハーグでの学会に招かれて、彼女の児童分析の発表を聴き、彼女が児童分析の先

駆者であることとその児童分析の内容を知っていた。彼女のM. クラインへの影響ははっきりしないが、ウィーン精神分析協会で会っていたA. フロイトへの影響は明らかであり（MacLean & Rappen, 1991）、本論文でも示したように、彼女の児童分析の論文を丹念に読んだ痕跡がある。だが、2人は論争によって、それぞれが自身のオリジナリティを主張する中で、彼女を無視し、さらにスキャンダルを伴った彼女の名前にライバルを結びつけることで批判した可能性がある。また、M. クラインの否認は1920年の学会で彼女から冷淡に扱われた（Grosskurth, 1986）、あるいは考えを否定された（Bronstein, 2001）ことも影響しているだろう。そして、遊びと無意識の産物との類似を最初に指摘したのはハンガリーの精神分析家Sigmund Pfeiffer（1919）であり、このことは当時の精神分析の世界では共通に認識されていたが、M. クラインはPfeifferにも言及していない（Geissmann & Geissmann, 1998）。

第三に、彼女の児童分析は未完成であったことである。鑪（1964）も指摘するように、彼女の児童分析の論文は、「論理的構成やまとまりが充分なされていない･･･エッセイ風」のものである。また、決まった方法はないとして、彼女はさまざまな技法を考案したが、それぞれの技法の記述は児童分析実践の手引きとなるほど十分なものではなかった。その点で、後継者2人のその後の体系化は児童分析の発展にとって不可欠であった。A. フロイトとM. クラインが彼女の児童分析の異なる部分を発展させたことで、彼女の児童分析の多くの部分は、現代の子どもの心理臨床一般で用いられるものとなり、受け継がれている。例えば、遊びと遊具の使用、遊びに子どもの内的世界が象徴的に示されること、信頼関係の構築、親を含む環境調整、親からの情報収集などである。しかし、2人の体系化がフークーヘルムートの仕事を霞ませて、彼女を不要にしたという面もある。フークーヘルムートは「精神分析に児童分析の基礎を与え、最初は知らないうちに模倣され、その後に非難され、最終的に忘れ去られたのである」（Geissmann & Geissmann, 1998）。

第四に、家族への配慮に関する優れた考察である。これらは、現代の心理臨床の水準から見ても非常に高い、豊かな内容であり、それを子どもとの心理臨床を開始して数年で気づいたことは驚くべきことである。彼女自身、ずっと肺病を患っていた母親、非嫡子の異母姉、その姉が未婚で生んだ甥など、常に家族の問題に悩まされ続けたことが、家族の考察を深めた背景要因として作用したのかもしれない。また、この彼女自身の経験ゆえに「最も恵まれた家族状況でさえも最初の数年間に子どもに与える無数の失望」があるという考えを持つことができ、家族に対して受容的な態度をとることができた可能性がある。前述したように、精神分析は子育ての過ちを全て明らかにすることで親に不信と不安を引き起こすことを述べているが、子育ての失敗に対する彼女の寛容な態度は親の不安を軽減させたであろう。そして、現在、彼女の児童分析の中で最も評価の高いのは、子どもとの分析を支えるのに必要な家族への関わりである。Plastow（2011）によると、Bergés & Balbo

（1996）とRodriguez（1999）は彼女の親への精神分析的なワークに注目していると述べている。そして、前者は彼女が親とのワークへの転移の影響を考慮し、転移から離れることの重要性を理解していたことの価値を強調したと紹介した。つまり、子どもの治療者への転移が分析者と親との関係に影響を及ぼし、親の治療継続への抵抗を管理する必要性を彼女が詳述したことを評価していると思われる。残念ながら、この部分は現在の心理臨床に伝わらなかったため、その後の臨床経験の蓄積を待たなければならなかった。また、MacLean & Rappen（1991）は彼女の死後出版された1924年の講義の重要性を強調し、これが英訳されていれば、彼女の評価はもっと変わっていただろうと述べている。このように、彼女の児童分析の技法の中には忘れ去られているものがあり、伝わっていれば子どもの心理療法の発展はもう少し早いものであったかもしれない。

４．おわりに

フークーヘルムートはA. フロイトとM. クラインよりも早く精神分析を子どもに適用した実践家であった。そして、彼女の児童分析はさまざまな試みと思考の宝庫であり、A. フロイトとM. クラインそれぞれが後に発展させた異なる２つの側面の要素を含んでいた。そして、この２人によって異なった側面が受け継がれ、児童分析はそれぞれ違う理論を備えた技法へと構築され、それらを通して彼女は現在の日本の心理臨床にも影響を及ぼしているということができるだろう。また、児童分析の創始者としての歴史的役割以外に、彼女はもう一つ重要な意義を持つ。それは、未知の領域に乗り出していく時の心理臨床家のモデルである。彼女は「経験のある分析家にさえ、ほぼいつも新しいアプローチの方法と新しい指針が広がっている。それにもかかわらず決まったルールも手順もない。クライエントの知的な発達、年齢、そして気質に応じて、どの方向に進むかを決めなくてはならない」（p.293）と主張している。彼女は技法の「ルールや手順」に縛られなかったからこそ、新しいことに乗り出すことができた。そして、その時に必要なこととして、彼女はあらゆる可能性を考え、試してみること、その時頼りになるのは経験、直感、そして忍耐であると訴えているように思われる。

＜引用・参考文献＞

Bergés, J. & Balbo, G. (1996) *L'Enfant et la Psychanalyse: Nouvelles Perpectives.* Paris: Masson.

Bronstein, C.(ed.) (2001) *Kleinian Theory: A Contemporary Perspective*. London: Whurr Publisher.. (福本修・平井正三監訳 小野泉・阿比野宏・子どもの心理療法セミナーin岐阜訳 2005 『現代クライン派入門－基本概念の臨床的理解－』岩崎学術出版社)

Ferenczi (1926) Further Contributions to the Theory and Tecnique of Psychoanalysis. London: Hogarth Press. 1951.

Freud, A. (1927) Four Lecture on Child Analysis. In *Writitings of Anna Freud. Volume 1, Introduction to Psychoanalysis: Lectures for Child Analysts and Teachers 1922-1935*. London: Hogarth and Institute of Psycho-Analysis, 1974, pp.1-69.（岩村由美子・中沢たえ子訳 1981 児童分析に関する 4 つの講義 牧田清志・黒丸正四郎監修 『アンナ・フロイト著作集 第 1 巻 児童分析入門』 pp.1-68）

Freud, A. (1928) The Theory of Child Analysis. In *Writings of Anna Freud. Volume 1, Introduction to Psychoanalysis: Lectures for Child Analysts and Teacheres 1922-1935*. London: Hogarth and Institute of Psycho-Analysis, 1974, pp.162-175.（岩村由美子・中沢たえ子訳 1981 児童分析の理論 牧田清志・黒丸正四郎監修 『アンナ・フロイト著作集 第1巻 児童分析入門』 pp.155-167）

Freud, S. (1906) *Sammlung Kleiner Schrifen zur Neurosenlehre*, Ⅳ, Leipzig & Wien: F. Deuticke

Freud, S. (1909) Analysis of a Phobia in Five-year-old Boy. *Standard edition* 10, London: Hogarth Press, 1955, pp.5-147.（高橋義孝・野田倬訳 1969 ある 5 歳男児の恐怖症分析 『フロイト著作集 第5巻』 人文書院 pp.173-275）

Geissmann, C. & Geissmann, P. (1998) *A History of Child Psychoanalysis*. London & New York: Routledge. (*Histoire de la Psychanalyse de l'Enfant*. Paris: Bayard Presse, 1992).

Grosskurth, P. (1986) Melanie Klein: Her World and Her Work. New York: Alfred A. Knopf.

Hug-Hellmuth, H. Von (1912) Analyse eines Traumes eines Fünfeinhalbjährigen. *Zentralblatt für Psychoanalyse und Psychotherapie*, **2**(3), 122-127.

Hug-Hellmuth, H. Von (1921) On the Technique of Child-Analysis. *International Journal of Psychoanalysis*, **2**, 287-305

Hug-Hellmuth, H. (1924) *Neue Wege zum Verständnis der Jugend. Psychoanalytische Vorlesungen für Eltern, Lehrer, Erzieher, Schlärzte, Kindergartnerinnen und Fürsorgerinnen*. Leipzig and Vienna: Franz Deuticke. (MacLean, G., & Rappen, U. 1991 *Hermine Hug-Hellmuth: Her Life and Work*. New York: Routledgenの抄訳から)

Klein, M. (1927) Symposium on Child-Analysis In *The Writing of Melanie Klein Vol.. Love. Guilt and Reparation and other works (1921-1943)*. London: Hogarth Press, 1975, pp.139-169.（遠矢尋樹訳 1983 児童分析に関するシンポジウム 小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳『メラニー・クライン著作集 1 子どもの心的発達』 誠信書房 pp.165-204）

Klein, M. (1932) *The Writings of Melanie Klein Vol.2 The Psycho-Analysis of Children (1932)*. London: Hogarth Press, 1975.（小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳 衣笠隆幸訳 1997『メラニー・クライン著

作集 2 児童の精神分析』 誠信書房）

Klein, M. (1955)　The Psycho-Analytic Play Technique: Its History and Significance. In *The Writings of Melanie Klein Vol.3 Envy and Gratitude and other works (1946-1963)*. London: Hogarth Press, 1975, pp.122-140.（渡辺久子訳 1985 精神分析的遊戯療法－その歴史と意義. 小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳『メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界』 誠信書房 pp.157-181）

MacLean, G., & Rappen, U. (1991) *Hermine Hug-Hellmuth: Her Life and Work*. New York: Routledge.

丹羽郁夫（2013）ヘルミーネ・フークーヘルムートの生涯と仕事. 法政大学大学院人間社会研究科臨床心理相談室報告紀要, **10**, 35-50.

Pfeiffer, S. (1919) Ausserungen der infantile-erotischer Triebe in Spiele, *Imago*, **5**. 243-282.

Plastow, M. (2011) Hermine Hug-Hellmuth, the first child psychoanalyst: legacy and dilemmas. *Australasian Psychiatry*, **19**(3), 206-210.

Rondriguez, L. (1999) *Psychoanalysis with Children*. London: Free Association Books.

鑪幹八郎（1964）児童心理療法の発達（Ⅲ）－フク・ヘルムートの児童分析をめぐって－. 青少年問題研究, **6**, 33-49.

Winnicott, D. W. (1960) Ego Distortion in Terms of True and False Self. In *The Maturational Processes and the Facilitating Environment: Studies in the theory of Emotional Development*. London: Hogarth Press, 1965, 140-152. (牛島定信訳 1977 本当の、および偽りの自己という観点からみみた、自我の歪曲 『情緒発達の精神分析理論』 岩崎学術出版社 pp.170-187)

Winnicott, D. W. (1977) *The Piggle: An Account of Psychoanalytic treatment of a little Girl*. E. Ramsy.(ed.) New York: International Universities Press (猪俣丈二・前田陽子訳 1980 『ピグルー分析医の治療ノート』　星和書店)